

ラベンダー

本田 禎子 北海道

むらさきの帯敷く中央分離帯果てなくつづくラベンダーロード
ポケットに乾きて香るラベンダーああ英子さんの今日ご命日
ラベンダー色のスートの似合ひます遺影明るし声までも聞く
ラベンダーファームに屈み五、六本ちよつと失札手紙に挟む
もう少し生きたくなりぬワクチンを終へ掌を合はす夏山に向き

月夜野

尾崎 潤子 千葉

あけがたのすべてが青きしづけさのそらにちひさく鳥のこゑする
わが髪をつねにシヨートにしたがりし母が庭木の枝ザザと伐る
旧町名へ月夜野は父の壮年の頃の勤務地月美しき里
消えた名の月夜野町をおもふときさびしげな父のよこがほ浮かぶ
谷川の双耳峰恋ふふるさとに帰れぬ夏がふたたび来たり

気の遠くなる程の時

清水 重男* 千葉

思い出が巡りめぐりて妻の居ぬ部屋の広さに夕あかね射す
さわさわと若葉が風に揺れている妻の亡きあと不確かな日に
雨の夜は生きゆくわれの行詰まり眠るほかなく明かり消したり
夕ぐれの色を深めて降る雨に打たれきざせり不意の悲しみ
気の遠くなる程の時流れたるように思えり妻を亡くして

わたしのこゑ

松下菜水 神奈川

いつの日も穏やかにあれ手鏡はわたしひとりを映すみづうみ
キャンプでの夏の怪談より怖し録音されたるわたしのこゑは
雨垂れのやうに相槌打ちてをり夫と手術の話するとき
赤銅色ブロンズの肌つややかな鬼百合のそばかす少女あなたが好きよ
陸橋に子らのこゑして朱の墨を水に流したやうな夕空

消防署の裏

関矢展子 東京

戸袋に嘴突はつ込めどむくどりの巢には届かぬ鴉の無念
生垣に突つ込む鴉 四方よもに散るむくどりの雛 今朝のどたばた
霧の粒小花につけてもぢぢりはぐるり螺旋の花ぐさりなり
将棋部の人ら集へる「しのぶ会」優勝せし弟の時代を語る
出動のありたるならむ長きホース十本ほど干す消防署の裏

謝罪に向かふ

黒石 孝 新潟

梅雨の田にあそぶ素足の風たちが緑のたひらへこませてゆく
叱咤して激励あらぬ鴉らの声に押されて謝罪に向かふ
今年から作付けはせず捨つる田に除草剤撒きいのちを枯らす
裏のひと退院して来て梅雨晴れに夫を指図しジャガイモ起こす
ほんねほんねもらつてくれないナス、キュウリ散歩して来て今日の家土産

福耳

三浦陽子 長野

歩いてるうちにかかどが脱げてゆく不出来な靴下だったねおまへ
どうにでもなれと言つたか言はないか大雨の昼白蝶が舞ふ
「ばあさんと呼ばれる時間が長すぎる」九十の叔母の福耳白し
昼寝から覚めて時間を見失ふ窓をあふれる六月の雲
わたくしのことばが惨事をひきおこす夢を見ながら寝坊をしたり

薬酒のごとく

山田宗夫 長野

掃除機を妻が差し出す木曜は家の掃除日けふが木曜
五輪にて遅配もあるとききながら朝採り野菜子らに送りぬ
山道にばてさうな妻が黒文字の香をふかく吸ふ薬酒のごとく
テレビ電話のなかでをさなが選びたるランドセルの赤は爺が贈らな
黄昏のひかりのごときもの見ゆ自画像の戦歿画学生の貌

自が供花

吉田美奈子 愛知

若き日のわが文の東見出だしぬ逝きたる夫の抽斗の奥
終の日の吸殻三本残れるをいまだ捨て得ず梅雨降りしきる
自が供花となるとは思ひみざりけむ夫植ゑし花切りきてひとり
思ひ出と呼ぶにはいまだ生々し急死の夫との最後のハグは
独りにてシーソーに乗る心地せり夫逝けば永久に動かぬままで

ゴジラとて

藤岡成子 兵庫

あらくさの生命力にはゴジラとて勝てやしませんいはんやわれは
わが村に迫る雷雲しばし待てノルマの草引きもうすぐ終る
虎杖の葉裏で夕立避けてゐる小き蝶たち、虹が立ちさう
いちじくの肌をすべりし水滴がその実の形になりて落ちたり
ひいばあとなれども父母の恋しくて甘えに帰るときどき墓に

歌の器

平尾潤子*鳥取

気持ちより先に言葉がはしりだす太郎も次郎も吾が詠む歌も
紅茶なら最後の一滴ゆつくりと溶けだす思いを歌の器に
グレースケリーがホールの螺旋に振りむけばさつと咲き立つカラーの花は
三十余り袋掛けせし枇杷の実の一つが色付き子は身籠れり
枇杷の実の夜ごと太れる庭の上を静かに渡る六月の月

猫になりさう

栗山由利 福岡

水張田を一羽でおよぐ鴨のうへすこしさみしい六月の風
将来ははじまつたばかり巢のなかの子ツバメたちの生存競争
へまごころは当たり前だる惣菜の棚にならんだへまごころ弁当
祝日が移動したこと気がつかず どうせ私はへサンデー毎日
平日も休日もなく暮らしてる猫になりさう三年のちは